

いざみ

札幌彫刻美術館友の会会報

第8号

平成16年7月1日

題字：國松明日香氏

本郷新彫刻シリーズ 8



奏でる乙女

中央区宮の森彫刻の道
ギターを持つ愛らしい少女、
彫刻刀をデザインした街路灯の
ある美しい坂道に懐かしいメロ
デーが流れる。
1953年(昭和28年)作

巻頭言

「美術館は生きもの」

小林金三

旅行のたびに、つとめてその土地々々の美術館を見ることにしている。戦後各自治体が美術館の充実につとめ、それぞれが独自の特色を出すように努力したおかげで、見て失望することがない。

特徴は収蔵する作品とそれを展示する地元の考え方に関連していて、単に美術館という建造物がそこに建っているというのではなく、その土地々々の土壤に根を下ろしている様子が伺えて興味は尽きない。

だからぼくは絵や彫刻や版画などを鑑賞するだけでなく、部屋にいる係の人——の方が大部分で、たぶん美術館を支援するボランティアだろう——に必ず声をかける。

—あなたは毎日のようにここに立っているのでしょうか、あなたが見飽きない作品はどれですか。

—この絵の展示おかしいと思いませんか。どこから見ても画面が光ってよく見えない。ほんの少し上の部分を前屈みにしてはどうですか。きっと今よりよく見えるはずです。

—作品保護のために照明を落としているのはわかるけど、それが余りにも過度になると、保護するのが目的なのか鑑賞するための展示なのか、わからなくなる。おじさん年寄りのせいかもしれないけれど、ひどく見づらいなあ。相談してみてくれませんか。

—ここの館長さんはどんな方?芸術を愛している人?

(2ページへ続く)

県の職員が天下っているの？学芸員は熱心ですか？

内政干渉まがいの注文から、何をお節介な！とおこられそうなことまでいってしまう。しかしほくの経験ではいやな顔をされたことは一度もない。みんな耳を傾けてくれる。ぼくの言い分がどうということではなく、一人の鑑賞者の言葉をきちんと受け止めようとする真摯な態度が、美術館の雰囲気にもまさる好感を与える。ああ、こここの美術館は土地の人たちに愛され、誇りに思われているのだなと感得する。

酒好きやコーヒー好きは、街を歩いていてもその店の良し悪しがわかるものである。美術館という知的雰囲気もまた、おのずから建物を包みそこからにじみ出るもので醸成される。美術館を訪ねてみようと思うほどのは、その道の達人である。専門家も及ばない鑑賞力を持っている。それは知識で見ようとするのではなく、ただただ自分の感性で見ようとするからである。余り短絡しては間違うけれど、いいか悪いか——よりも、好きか嫌いか——の判断力は強烈だ。しかも鑑賞を繰り返すこと、「好き」の領域が自然と「よいか悪いか」の鑑識眼をひろげることになるから、おそろしい。ゆめゆめ、

しろうとを見損なうなかれ！である。そればかりか、美術館は、実はそれらの人たち——美術愛好家という名のしろうとたちによって支えられているのである。

本郷美術館は都心を離れた住宅街の中にある。「芸術の森」とともに札幌市が都心だけでなくその周辺にふくらみを持つようになった象徴的存在だとぼくは思っている。しかし存在しているだけが価値ではない。美術館は建物ではなく、美術館活動の拠点であることを自覚して絶えざる活動が必要なのだ。活動する美術館、つまり美術館が生きているのでなければならないということである。

専門家である学芸員は知識の戸棚ではなく、知識を鑑賞者に伝える伝道者でなければならない。と同時に彼を支える旗振り役と下支えをするボランティアによる「友の会」の共働が不可欠である。

何よりも芸術作品は美術館のものではなく、市民、芸術を愛する普通の人たちのものだからである。ひろく開かれてこそ、作品は作品でありつづけるであろう。

(元北海道新聞論説主幹・創成川ルネ
サンス世話人)

目 次

美術館は生きもの	小林金三	1-2
「ヒマラヤ杉」と本郷新	柄内忠男	3
地域の中のミュージアム	中島宏一	4
河邨文一郎と冬の石狩	濱 久子	5
「北の彫刻展 2004ー」開催要項	札幌彫刻美術館	5
札幌彫刻美術館と私	渡辺洋子	6
生涯学習と博物館ボランティア 2	高橋淑子	7
六本木の本郷新さん～「奏でる乙女像」	仲野三郎	8

高き御空の下で	島 正孝	9
5月14日「友の会」つどい雑感	早川敏之	10
Hokkaido Sculpture-Webと		
仲野会員の新聞記事	橋本信夫	11
遠い記憶の中	早川敏之	12
アトリエ訪問とバスツアー	原 寿子	13
抜海の目（文化なんか重視していません・Y）		13
ギャラリーシリーズ 5	原 典夫	14
友の会だより	総会報告	三上正一 15
	ビデオ制作案内	16

“ヒマラヤ杉”と本郷新

柄内忠男（画家）

1979年10月18日というと、早くも四半世紀も前になる。関東一円を吹き荒れた20号台風は、本郷邸の“ヒマラヤ杉”を吹き倒した。この日、私は東京銀座の文芸春秋画廊で個展を開いていた。画廊真向かいの店の看板も凄い音と共に吹き飛ばされ、地下鉄以外の交通機関は麻痺状態となり、銀座の路も、飛ばされそうな人影だけだった。

個展が終わって、私は本郷さんのお宅を訪問した。小田急の梅ヶ丘駅から澄み切った初秋の空を眺めながら本郷さん宅に近づくと大きな“ヒマラヤ杉”が倒れ、台風の凄まじさが目に入った。「あまり大きくなつたので、そろそろ切ろうかと思っていたところさ。おかげで切りやすくなつた訳だよ」と、いつものようにキラリと目を輝かせる本郷さんだった。

“ヒマラヤ杉”的根本には2トンもある石が置かれていたために家がこわされないで済んだのだと言う。

“ヒマラヤ杉”は、昭和9年本郷さんのアトリエの新築の際に植えられたもので、当時は2メートルほどのもの、それが45年の時を経て23メートルという大きな樹に成長した。まさに本郷新と共に生き続けたのである。

私の個展の初日のパーティーには、北海道出身の二瓶等観（大正末期北海中学で本郷新、菊地精二に絵を教えた先生）、佐藤忠良、松島正幸、岸葉子、小野州一、竹岡羊子、米谷哲夫さん等会場一杯にたくさんの方々が出席して下さった。

本郷さんは体調を崩されておられたが、次男淳さんの令夫人柳川慶子（女優）さんに付き添われ、会場にお見えになった。顔色もよく、ニコニコと元気そうな本郷さんがなぜ杖についておられるのか、ご病気のことを知つておられる方も、知らない方も視線が注がれた。本郷さんから乾杯の音頭でお祝いの言葉も頂いた。

この時のたくさんの写真の中から佐藤忠良

さんにお送りしたところ「本郷さんが気持ちよさそうな笑顔でいるのが印象的です。今は、すっかり細くなりあまりよくない様です」と、お便りがあった。

個展から2ヶ月後の12月21日、本郷さんからの電話で「あの“ヒマラヤ杉”は、ついこの前5本に切られたんだ。その道の専門家に云わせると、樹は倒れても彫刻家に彫られるとしたならば、樹にとってはこの上もない喜びだそうだ」と。「今は、足が痛くて困っているのだが、徐々によくなるだろう。春になれば、私にとって二つの喜びがある。それは、宮の森に本郷彫刻美術館*ができるので札幌に行けるし、中央公論社から『彫刻の美』が再出版される。この本には彫刻の十戒といふのと、随筆十篇を加えたのが3月に出るんだ。だから、私は春がとても待ち遠しい」と。

本郷さんは、終焉を迎えるながらも、生命のある限り闘う気概を捨てようとした。

「酒は、あまり飲まない方がよい。そろそろ歌でも歌おうかという気分になつたくらいで止めて丁度いいんだ」と、加えてくれた。本郷さんが札幌に見える時、いつも決まって本田明二さんと三人で語り、本郷さんのおっしゃる「美しい薄野の夜」では、旨い酒で楽しく過ごしたものだった。私たちの無茶な飲みっぷりを気にして下さったのでしょう。これが、最後の電話であろうとは思わなかつた。

* [（財）札幌彫刻美術館に本郷新記念館が併設されている]



柄内忠男先生、柳川慶子さん、本郷新先生
文芸春秋画廊でのオープニング

1979年10月15日

札幌彫刻美術館友の会総会「講演」要旨

地域のなかのミュージアム 「おらが町の博物館、 その存在意義を考える」

中島宏一

1. 地域へのアピール！

子供たちが、学校でもらった博物館の案内チラシを家庭に持つて帰ってきます。すると保護者は、子供たちが興味関心を示す博物館へ行ってみようかな、という気分になる。

これはごく普通の利用形態。広報しなければ、住民が博物館に足を運ばない現実が生み出した「学校利用」です。

しかし、このような活動の繰返しだけでは「博物館がなぜこの町にあるのか」という根本的な理解が曖昧なままで、そのうち両者とも「息切れ」してしまいます。というのは、「来てください」の呼びかけに応じて来館した住民は、あくまでも客観的に博物館を見る「お客様」に過ぎず、一方博物館も利用者を「お客様」としか位置づけなくなってしまうのです。これではテーマパークと何ら構図は変わりはありません。ですから、博物館に対する利用者の評価は「つまらない」や「面白い」、そして行政は「利用者数」を評価の基準としてしまうのではないか。

私たち学芸員（専門スタッフ）に求められているのは、「博物館の活動を理解する住民をいかに増やすか」、「今まで自己完結型に終始してきた意識をいかに変革させるか」にあり、これらを解決するには地域住民によって構成された博物館ボランティアが大きな役割を果たしてくれます。

2. 博物館は誰のため、何のためにあるのかを考える

公立の博物館の場合、「行政」が博物館を設



置し「館」が運営します。そして利用対象は「住民」です。さて、これら三者は果たして博物館が有るべき「使命」を理解しているでしょうか。

誰のためにあるのか…当然、住民（利用者）のためにある。何のため…当然、地域の文化振興、地域のことを博物館活動を通して深く理解してもらうためにある。

例えば札幌彫刻美術館の場合、なぜ札幌に彫刻美術館が「必要」なのかを、札幌市、美術館、住民に問い合わせたとしたら、三者はどのような答えを出でてしまうか。もちろん、開拓の村や近代美術館にも同じことがいえます。

博物館はその「地域」に「必要」だから設置されました。財政事情が悪化する中で、とかく博物館運営や行政に対する批判がありますが、住民も納税義務を果たせばいいというものではありません。博物館がなくなってしまったなら、住民、特に未来を担う子供たちはどこで地域のことを学べばいいのでしょうか。

3. 博物館の使命を住民が知る

博物館は地域のニーズをつかむことが大切です。しかしさらに重要なのは、「博物館が、そして職員が何を考えているのか」を住民が常に知る環境をつくることです。博物館はどのような考えに基いて活動を展開しているのか、そのプロセスを開示することによって、住民は博物館が地域に存在する意義、さらに住民としての意識を理解するはずです。

博物館とボランティアの関係がこの構図を表現しています。両者の良好なパートナーシップによって活動を営んでいる博物館では、お客様とボランティアとが「語り合う」場面が多く見受けられ、住民から託された資料を通して「人と人との交流」が育まれています。

博物館ボランティアは、地域を考える住民として先導的な役割を果たしているのです。

（財団法人北海道開拓の村学芸員、

北海道大学高等教育機能開発総合センター
生涯学習計画論講座博士課程）

「無辜の民」と河邨文一郎先生

濱 久子 会員

「厳冬の石狩濱の風雪を体験し『石狩』の像を訪ねる会」が毎年本郷新の命日の2月13日に行われていました。札幌彫刻美術館の理事長の河邨先生も平成6年に、ご夫妻で参加され、私は初めてお目にかかりました。

町長、理事長、本郷淳などの献花が終わり、石狩鍋の昼食のとき、河邨先生のご挨拶に続いて宣子様が「河邨の妻です、初めて河邨の家を訪ねたとき大きな裸像にびっくりしました」と気さくに自己紹介をなさいました。

平成9年には石狩市への感謝と市制執行を祝う気持ちをこめて感謝状と本郷新作のレリーフ『母子像』が河邨理事長から石狩市長に贈呈されました。そして平成11年、献花を終えて昼食のとき、私が原始林に入っていますといいましたら「中山君、元気かね?」といわれ、びっくりしました。たまたま2月の初め腰椎を折られて入院なさっていることをいいましたら「年をとって骨折は良くないね。お大事にねと伝え

て」と仰せられ、中山先生にお伝えしたことがあります。中山先生は歌人で原始林の代表者でしたし、河邨先生は詩人で、お年も同じくらいでした。

医者である先生も詩人の先生も全く存知あげなかったのですが、冬季オリンピックテーマソング「虹と雪のバラード」の素敵な詩にすっかり魅了されました。そしてあの歌いやさしい「虹の地平を歩み出て影たちが近づく手を取り合って・・・」の懐かしいメロディをいまでも口ずさんでいるほどです。

先生は札幌の虹は世界の人を迎えるアーチと歌われたのです。先生は札幌の空にかかる美しい虹のような方でした。

札幌彫刻美術館のご縁で、一介の主婦が先生とじかにお話できしたこと、3月25日のパークホテルでのお別れの会に出席して白いカーネーションを献花出来たことに感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

主 催 財団法人 札幌彫刻美術館
後 援 北海道・北海道教育委員会・札幌市・札幌市教育委員会

期 間 平成16年8月27日(金)~10月11日(月)
10:00~17:00 会期中無休

場 所 札幌彫刻美術館本館・彫刻庭園

出品作家選考

(財) 札幌彫刻美術館 館長 三輪 望
主任 森川秀美
事務職員 大場裕子
学芸員 井上みどり

出品者 北海道を活躍の拠点とし主催者の招待する彫刻家
伊藤三千代、岡部 亮、笠原昌子、川上加奈、
椎名澄子、野村裕之、野又圭司、伴 翼

出品総数 未定

観覧料 一般 500円 (団体450円) * 団体は10名以上
小中生 無料

問合先 財団法人札幌彫刻美術館
〒064-0954 札幌市中央区宮の森4条12丁目
Tel/Fax 011-642-5709

札幌彫刻美術館

「北の彫刻展 2004
—新しい具象—」

北海道を活躍の拠点とする彫刻家の優れた彫刻作品を道民に紹介し、道内の彫刻活動の振興に資する。今年度から、テーマ展とします。2004年のテーマは、「新しい具象」です。一般的に具象彫刻は、身体表現といえます。今回は身体表現に限定せず、独創的な表現によって新たな具象の可能性を探求している作家の作品をご紹介します。

「札幌彫刻美術館」と私

渡辺洋子 会員

私がはじめて彫刻美術館を訪れたのは北海道へ引っ越してきたばかりの小学生のときだった。その時は特に知識もないからただただ素直にその作品の存在感にびっくりし、「冰雪の門」の像のちょうど手のひらの部分が自分の頭に迫り、ものすごく印象深かった。広島の近くから引っ越してきた私は「嵐の中の母子像」は見たことがあるなあ、と思う程度だった。そのうちに飽きて妹たちと野外の作品のまわりでかけっこをしたりしたが、父がいつまでも「ふんふん」「うむうむ」などといってなかなか帰ろうとしなかったのをよく覚えている。

2回目の訪館は中学生のとき。美術に興味を持ち、クラブにも所属していたが自分で木や花、時には人間をスケッチしたりするのが好きで特に本を読みあさるとか、芸術家の作品に感銘を受けると言うようなことはなかった。たまたま、同じクラブの女の子が研究熱心で美術館めぐりに付き合わされた形だった。当時住んでいた八軒から地下鉄で円山まで行き、バスター・ミナルからバスに乗る。間違えていないかどうかとても不安だったし、大体バスを降りてからでさえ迷いそうだった。当時は今のように素敵でレングタイルの道ではなかったように思う。本当にごくごく普通の(いや、瀟洒で閑静な)、住宅街の一角なのである。

そこで再会した「冰雪の門」。ああ、ここか!!と思った。建築や地理の記憶は不思議と全部抜け落ちていて、彫刻作品からはじめて見た時の感動がよみがえってきた。この時に初めて(もうすでに中学生だったの

で)本郷新と言う彫刻家の全国的知名度とその作品、特にモニュメント像の多さを資料で知った。あんなに印象的だった冰雪の門の手は記憶の中より小さかった。全体的には大きすぎるくらい大きく作ってある手だから小さく感じるはずはないのだが、やはり小学生の頭では異常な存在感にイメージが膨らんでインプットされたのだろう。「本郷新」と言う作家に対する認識はこの中学生の時が最初と言うべきだと思う。

そして何の因果か知らないがその後私は本郷新の母校である高校に進み美大で彫刻を専攻するのである。そして彫刻家の伴侶を持ち、つい最近北海道に帰ってきた。

主人の活動を通じて札幌彫刻美術館友の会を知ったのはこの時。出産、育児を言い訳に創作活動から離れていた私はこの会の活動に再度自分と美術とのつながりを見出し、まだまだ若輩者ながら友の会で集まる時は彫刻美術館と関わっていられる事を誇りに、また幸せに感じている。

つい先日友人の展覧会のパーティーがあった。彫刻美術館館長さんや学芸員さんも来ていた。実は私はこの時にはじめて館長と学芸員さんにお会いするのだがうすうす感づいていた事実を確認した瞬間だった。「三輪先生!」…なんと館長は私が中学校の時の美術の先生!!いつも名前を見て、もしやもしやとは思っていたがやっぱり!!そのころから全く変わっていない立派な体格。間違いない。うれしくなってしまつつい大きな声で話しかけてしまった。本当に、なんと言うめぐり合わせだろう。

こんな私事もあってますます彫刻美術館が好きになった私でした。

生涯学習と博物館ボランティアについて(Ⅱ)

高橋淑子 会員

今回は全国的な博物館ボランティアの実態をお知らせしたいと思います。

1 博物館ボランティアの実態

日本博物館協会が昭和62年度に実施した『博物館のボランティア実態調査』によると回答の寄せられた全国1,172館の博物館のうちボランティアの導入されているのは17%に当たる200館でした。12年後の平成11年度には231館22.1%に増えています。現在も同じようなペースで確実に導入館が増えているといえる博物館ボランティアですが、博物館から見た活動内容や導入目的は下記のようになります。

活動内容・学芸業務補助・来館者接遇
博物館付帯活動補助・
環境整備

導入目的・在野の知識、経験の活用と
吸収・職員の人員不足補
填・導入による館の活性化・地域との結びつき強化

私のかかわっている二つの博物館のうち、円山動物園では主に解説やコースガイドという形で来館者接遇を行い、道立近代美術館ではボランティアを7部に分けて資料整理という形で学芸業務補助を、解説で来館者接遇を、展覧会の補助で博物館付帯活動補助の活動をしています。

長野の禄山美術館では環境整備に当たる植木や草花の手入れなど庭の整備もボランティアの手によるといいます。

博物館側でもアルバイトの予算がないからという金銭的理由からボランティアを導入するところもあるようですが、それなりに有効に活用しているようです。

2 博物館ボランティアの理想と博物館の姿勢

ボランティアの求められる基本的用件としては

- ① 学ぶ姿勢を持っていること
- ② 奉仕の精神があること
- ③ コミュニケーション能力を持つこと
- ④ 継続性が大切であること、
・・があり、この要件を満たした上でボランティアは自ら

博物館を利用する、
博物館活動に参加する、
博物館に物申す、
という姿勢が必要とされます。

一方、博物館側は学芸員が中核となって社会教育施設を自任し、ボランティアに生涯学習の場を提供しながら、活動を通して新しい関心や興味をボランティアに発見してもらい、その質の向上を計る。このときボランティアが博物館活動を理解している大切な利用者の一人であることも忘れないで欲しいと思います。

次回はいよいよ、この実態と理想を踏まえたうえで、私たち札幌彫刻美術館友の会がどのような形でボランティアとして札幌彫刻美術館を活動の場に出来るかを考えます。

「本郷新の野外彫刻の魅力」ビデオ制作メンバーの募集案内

社会教育のための表記の教材ビデオを友の会で制作することになりました。

そこで会に「ビデオ制作委員会」を設けて企画内容の検討、シナリオ作成、撮影、編集、制作などを行います。

本企画は友の会による初めての制作活動です。大勢の会員の積極的な参加を期待しています。興味のある方はどなたでも、また経験の有無は問いません！！

友の会だより 16 ページ 参照

連絡先：会報「いずみ」編集委員まで Tel:011-643-7246

六本木の本郷新さん—奏てる乙女像

仲野三郎 会員

昨年10月、六本木に話題の森美術館が開館した。妹の誘いに乗って留守勝ちの妹の家を10日ほど借りることにして上京、上野、横浜、箱根と楽しんで来たが、今でも強く記憶に残るのは六本木だ。六本木は甥がイタリア料理店を開いていて上京の都度フルコースをご馳走になるが行くのは夜ばかり。今日は森美術館と出来たら奏てる乙女像を見ようと家を出た。

新宿から六本木へ。地下鉄を降りて歩き出したら壁に六本木ヒルズの看板と矢印が目に入った。どこかの美術館では今でも地下鉄を降りてどう行けばいいのですかとの電話が入るそうだが大違い。次の曲がり角にも六本木ヒルズへの矢印があって迷うことはない。

森美術館に行く前に本郷新の像を探そうと路上に出てから目をこらす。六本木の交差点と記憶しているので角を曲がるたび向こう側はと四つの角を確認する。三つ目の交差点に来たとき四車線の大型車の間にちらりと像らしき物が。信号が変わるので待って渡る。

あったあった。交差点角の銀行の前が広場になっていて像を囲むように10脚程の石作りの椅子が置いてある。楽器を持った若者たちがわいわいがやがや。リーダーらしい男にこの像を見たさに札幌から来たのだけれど、と頼むと快く場所を譲ってくれた。嬉しい。

ちょっと太陽の位置が悪いけれど待っているわけには行かないでシャッターを押す。説明文もよく写るよう念じながらカメラを換えてもう1枚。

そこには六本木の地名の由来と像が置かれた経緯が書いてあって読んでいるうちにジーンと来た。

六本木の地名は、武蔵野の南東の小高い丘に六本の松が聳え、何処からも見えたことから來たという。世田ヶ谷生まれの私がそれは知らない。

戦後焼け野原と化したこの地を7年の歳月をかけて協力し再建した経過と、その完成の記念として本郷新の像を設置したことが書かれている。その中の一文が素晴らしい。

『この記念に平和と協力を表徴する本郷新氏の労作を請い得てそれを街角に見る喜びと共にこの地のささやかな歴史を併せて記す』とある。

さらにもう1枚の案内板には『第1回六本木祭の開催を記念して、混凝土像毀損著しき為再度本郷新先生に懇請、新たに青銅像とし之を完成す。昭和五十年五月』と書かれている。

つまり像が置かれたのが昭和29年で、わだつみ像に宿る本郷新の平和への祈りを知るこの地の人々が21年間守り続け、そして又本郷新に頼んでブロンズ像にした。本郷新を敬愛する気持ちが伝わって来て心温まる思いだった。

写真を撮り、記録し、彼等と話して約1時間、ふと異臭を感じた。興奮していて気が付かなかったのだが異様に臭い。排気ガスだ。交差点なので信号の変わる都度発進する大型車が黒煙を吹き付ける。もう一度像を見直すと緑青色ではなく赤黒く変色している。説明文も読むのに苦労したが地面から50cmくらい下の文はよく読める。つまり排気ガスで膝から上が約30年間で腐食したのだ。

小さい街角の広場に楽しみを求めて集まる若者、そのささやかな楽しみの場がこれでは可哀そだなと思いつつ、礼を言って帰路についた。

(表紙の写真をご参照下さい)

高き御空の下で

島 正孝 会員（長野県）

長く生きるという事は、悲しい体験を幾重にも積み重ねることに違いない。私の貧しい62年の生活を振り返ってみても、このことは納得し、肯くことが出来る。しかしその反面、青春時代には夢想だにしなかった歓びの訪れに感動して、しばし立ち尽くすことも、これも又事実である。

若い頃から山登りと同様、音楽も好きで、ただ聴くだけならば沢山聴く機会に恵まれた。東京に近いという地の利もあって、今でも月に2～3回は上京し、サントリーホールや上野の文化会館での演奏会に出掛けている。これまででは、主としてバッハ、モーツアルト、ベートーヴェンの作品、それも室内楽作品を中心に聴いてきた。友人からは、ショパンは、マーラーやバルトークは何故聞かないのかと非難され、憐れまれたことも一度や二度ではない。そんな時の苦しい言い訳は、まだまだ好きな作曲家の作品を十分聴いていないので、納得するまで聴いたら勿論ショパンも聴きますよといつて、やんわりと友人の冷たい視線をかわしてきた。シューベルトは視野の中にあったが、どうしても気に染まず、これまでずっと気合を入れて聴く機会がなかった。

それがどうだろう。60歳の記念山行で、5日間の冬の山旅から無事に帰り、最初に選んだCDが内田光子さんの弾くシューベルトのピアノ・ソナタ第21番・変ロ長調D.960であった。雪に閉じ込められ、独りテントの中で過した2日間は身動きも出来ず、死の不安が去来したこともある。こんな体験の後で聴いた音楽だったからだろうか。天上の幕が切って落とされ、天国を覗き見たような大きな衝撃と興奮の渦の中で幾日かを過した。この時を境にして、私にとってシューベルトは救いの音楽となった。

年に何回か北海道をお訪ねしている。私の場合、親しい彫刻に逢いに行っているといつてもいい。札幌芸術の森公園の砂澤ビッキ氏の『四つの風』、釧路・幣舞橋の道東の四季の船越保氏の『春』。季節を変え、時間を変え、可能な限り厳しい季節を選んで訪れている。

2003年1月、釧路を訪ねて『春』と向かい合った。深夜の釧路川は薄明かりの中で、天の川のように柔らかく、帶のような広がりを見せていた。川の流れに目を移したその瞬間、何か聖堂に鳴り響くオルガン音楽、バッハのシューベルト コラールが聴こえてきた。振り返ると、船越さんの乙女像は、天から降ろされた銀の梯子を軽やかに登って、天に還って行くところであった。いつの間にか吹雪は止み、淨められた幣舞橋から天に還る乙女の後姿に、私は手を振る事も忘れて唯々眺めていた。ほんの一瞬の出来事ではあったが、私は確かに天に還って行く聖女を観た。これは誰にも話していないが、今も確信している。

正直申し上げて、本郷新さんの作品には、心を寄せて出合いたいとは思わず、これまでずっと見過ごしてきた。作品は比較的早くから東京で観ていたし、現代彫刻センター主催の六彫展は初回からずっと関心をもって観ていた。何故だろうかと時々はたち止って考えてみたことがあったが、納得出来るような答えは思い浮かばなかった。

2004年1月、北海道を訪れた。釧路から網走、旭川を巡って、札幌から小樽に向った。電車の窓から厳冬の石狩湾をじっと眺めていた。夕映える空は無く、西からの強い風に海は重たく暗く沈んで、身悶える動物の悲しみさえ感じられた。

『この、荒れる大きな自然の中に置いてこそ、本郷新さんの彫刻は生命を吹き返すのだ。』と独り呟いていた。当然の事ではあるが、彫刻は空間芸術である。十分に吟味され、整えられた場所を得てこそ、生命を与えられるのだと、この時心底納得できた。旅の大きな収穫であった。

私は本郷新芸術の目指すものは、悲哀と救済、永遠なるものへの憧れだと思う。シューベルトの音楽がバッハやモーツアルト、ベートーヴェンの音楽と共に、今の私にとって無くてはならないもののように、厳しい、厳しい北海道の大きな冬の自然の中に立って、繰り返し本郷新さんの残して下さった作品と向い合って、沢山の啓示を与えて頂きたいと希っている。

5月14日「友の会」つどい雑感

早朝に窓の外を見たら、昨夜まで降り続いた雨はすっかり晴れ上がり、その心配は期待と楽しみに変わっているのでした。

期待と楽しみとは初めて参加するピクニック。7月で62歳になりますが、何十年間の建築設計の現業時代には（今も現業ですが）全く考えられなかつた事でした。

おにぎりの弁当を持って初めて会うグループの人たちと、春の「なまこ山」を楽しむ一日です。札幌に住みながら正直、「なまこ山」の存在すら知らなかつたのです。

最寄りのバス停まで出迎えてくれた斎藤さんにお会いして、ご一緒に歩いて10分ほどの坂道を登り、ほどなく美術館前で皆さんに合流する。簡単な紹介と説明の後は、日頃パソコンの画面と向き合う毎日と打って変わった雨上がりの木漏れ陽の新緑浴。小高い丘状の「なまこ山」の登りは、短時間でしたが心洗われる体験でした。その時のすがすがしさは、時代が低成長で、削減、短縮、節減と、人をあまりにも「部品化」し、あそび心を圧殺してしまつたが、自分も例外ではなかつたかと。時には「タイトジャケット」を脱いで「まま」になる事の必要性を実感するのに充分でした。

* あそぶ⇒遊ぶの意味ではなく云わばクリアランスみたいなもの

仕事柄JRで地方に出掛けるのですが、以前は道端で遊ぶ子供達を見かけたのですが、最近はどこに行つてしまつたのか？沿線の道端でその人影すら見かける事がありません。大人達は仕事と生活で精一杯、子供達は偏差値で精一杯、ウイークディに美術館めぐり、ましてピクニックなどリタイヤでもしない限り到底限られた人達にしか出来ないのが実情でしょう。その限られた人達に今日は自分がなれたのでした。

近代目的主義は、今の世情はよくも悪しくもその本質を理解されないままに、歪められた合理性のみ受け入れようとしているように感ずる

早川敏之 会員

のです。しかし文化的には、時には近代を吐き出し、近代の「害毒」を排泄するためにも曖昧さとも言える「まま」「あそび」を中心としたキーワードが無い限り、「人があつまる」「人をあつめる」のも難しいし、その「持続」自体、困難とさえ思えるのです。

合理主義の「暴走」に待つをかけ、オルタナティブ（代案）を、具体的に提案しなければなりませんが、あそべる人が少なく、あそび心のない（言い過ぎですか？）近郊に建ち並ぶ住宅に住まさるを得ない人達に、「友の会」は、それを模索実行しているのだと感じたのです。

実情は全ての者は螺旋階段を登りたい願望はあるものの、日常生活の中では、創造するエネルギーが萎縮すらしており、無関心で、その必要性を実感している人が果たしてどれほどいるのでしょうか？疑問が残ります。

大変むつかしい問題ですが、どうしたら「人を外に連れ出すか」は、ビジネスマーケットや、自然保護の必要性の観点、文化を衰退させない理論として言われ続けられている課題でもあるのです。（一級建築士事務所

はやかわ建築プロジェクト 代表）



春の「なまこ山」を楽しむピクニック
本郷新作「太陽の母子像」の前で
(2004年5月14日)

“Hokkaido Sculpture-Web”と仲野会員の新聞記事

北海道では150余年の長い開拓史の様々な機会に夥しい数の野外彫刻が各地に設置されてきました。しかし、残念ながらこれらの野外彫刻に関するまとまった資料は行政機関も含めてどこにもなく、その全貌については手がかりさえ得られません。

こうしたことから会員の仲野三郎氏が1985年頃、道内各地に散在する野外彫刻の設置状況をくまなく調査することを思い立ち、奥様と一緒に約20年近く野外彫刻の写真撮影と資料の収集に当たってこられました。その結果全道に分布する彫刻作品（美術館収蔵品などを除く）約2,200点（全体の95%以上）について、四季折々の自然環境を背景にした10,000枚以上の彫刻写真と所在地、作家、大きさ、特徴、材質、台座や設置の経緯など、設置状況に関する様々な記録が収集され、極めて詳細な基礎台帳（パブリックアーツの戸籍）が作成されました。

これらの資料は北海道大学大学院工学研究科の大内東教授と研究室によって評価され、“Hokkaido Sculpture-Web”として概要設計がなされてインターネットによる公開の道が開かれました。全国の美術ファンに道内の野外彫刻が広く紹介され、注目されるよう支援できるのは友の会としても望外の喜びです。

北海道には彫刻家が多く、各地にアトリエをかまえて旺盛な創作活動を行っています。特に来年は本郷新の生誕100周年を迎えるだけに、これらの野外彫刻画像が情報工学の先端技術と組み合わされ、道内各地の美術館、ギャラリー、アトリエなどを結ぶ「北海道彫刻ナビ」として美術ファンや観光客に広く利用されたとき、札幌彫刻美術館もこれまで以上に注目される存在になるに違いない。

橋本信夫 会長

* * * * *

北海道新聞 2004年(平成16年)5月25日(水曜日)

道内の2175点 写真で紹介、検索も

野外彫刻データベース化

夫妻、カメラ行脚10年
北大と連携 年度内完成



北海道新聞 2004年(平成16年)6月3日(木曜日)

9 文化

全道の野外彫刻 データベース化

仲野 三郎

2千175点撮影、ネットで検索も



遠い記憶の中

早川敏之 会員

遠い記憶の中で、その会うものへの期待はあたかも以前の恋人に何十年の歳月を経て会う事への不安と期待が複雑に交差する様であり、会つたらなんと声を掛けようかと…。「ご無沙汰しております」では硬いし、「お元気でしたか?」でも「お変わりありませんか?」でも…。やっぱり「お久しぶりです!」がいい。などと勝手に会う前から思っている様に…。

故田上義也氏設計の本郷新の春香山山荘。

今からもう40何年前の事で正確な時期は定かでないのですが、記憶では私が北海道に来て間もない21か22歳の頃でした。札幌グランドホテルのコック長をしていた長谷川さんが独立し、自分の店をスタートさせる拠点として春香山に海を見下ろせるホテルの建設を、私が以前勤務していた当時のゼネコンに依頼され、その時の設計担当の一人であったのです。

長谷川さんが親しかった本郷新さんに声を掛けて山荘は建てられたと考えられます。ですから建設は、ほぼ同時期ではなかったかと記憶しているのです。

当時はホテルと言えばグランドホテルであり利用していた田上さん、本郷さんが長谷川さんのファンでもあった事は想像出来ます。

田上さんとゼネコンとは田上さんの弟子が当時のゼネコンの設計部に勤務しており、田上さんが帝国ホテルの設計者のライトの弟子で、帝国ホテルはゼネコンの前身の大倉土木が施工した事などの縁で、本郷さんの山荘と長谷川さんのホテルの建設が同時期であった所以がうかがえるのです。

まさか今回その場所に、あれから40年経つて自分が行く事になろうとは夢々考へてもいませんで、びっくりしたのが偽らざる心境です。

長い歳月が経つて私も年をとりました。

2つの建物の面影を少しでも見る事が出来るなら!その思いで胸が膨らむのでした。

雑木林の傾斜地に生い茂る背丈の伸びた雑草

を搔き分けて、それはあたかも元復員軍人と家族が何十年か経つて激戦地を鎮魂に来た思いの様でもあるのでした。

開けた場所に出た途端、目前に朽ち果てた建物の残核。東南アジアの密林の中で遺跡に逢つた、そんな威厳すら感じたのですが、目指すホテルとは違っていました。間もなく忽然と姿を現した山荘は紛れも無く私がホテルの設計に関与していた当時の山荘そのものでした。(写真)



規模、素材は異なるものの、コルビジェのロンシャンの教会を思い出したのです。

誰に看取られる事も無く朽ち果てる寸前のそれは、果たして我々がここを訪れるのを想像していただろうか…。

木製の螺旋階段は、建物の中心にあった事が幸いしてか意外と原型を保っていた。暖炉は煤け具合からみると、あまり使われていなかつたのではないかと想像出来ます。

となれば本郷新は、寒く不便なここを、冬は避けて、夏の避暑地として利用していた?カーテンは当時のまま残っているものの、至る所の窓ガラスが破損しており、破損さえしていなければ、内部はしっかりとしていたに違いない。

主が代わっても使用さえされていればきっと原型を留めていたに違ないと…。

時代や世相は、本郷新の山荘、田上義也をこの場合、必要としなかつたのかと…。あるいは本郷、田上の関与すら知らなかつたと。

いずれにしろ数奇な運命を経て今、老体余命幾許も無いながら、気高くも、私達のこの前に本郷新の山荘はある。

アトリエ訪問と日帰りバスツアー

原 寿子 会員

主催：札幌彫刻美術館友の会

日時：8月13日（日）9時～16時

参加者：会員32名 一般9名、合計41名

行き先：

「渡辺行夫先生のアトリエ、本郷新先生の
旧アトリエとマリーンヒル ホテル小樽」
友の会活動の一つである「作家との交流と会
員の幾陸を兼ねたバスツアー」！！

最初は、銭函の閑静な住宅地にある渡辺先生のアトリエ。風に揺れる木立の中に、実験的と先生が言わされた白い石を張り合せた独創的な形の彫刻が散在していました。先生のお話しを聞きながらその風情と手触りをのんびり楽しみました。

次に、背丈よりも高く生い茂った笹やいたどりを踏み分け、春香山の中に廃屋として残っていた本郷新先生の旧アトリエと窯を見ました。40年前に本郷先生はここで作品の構想を練られ、仲間やご家族とどんな話をされたのでしょうか。「麦草やつわものどもが夢のあと」の芭蕉の句が自然に思い出されました。

ホテルでは美味しい食事の後、仲野会員の撮影した北海道各地の野外彫刻写真の中から本郷新の作品64点を選び、橋本会長がパワーポイント用にまとめた彫刻写真スライドを仲野会員の解説で鑑賞しました。

抜けるような青空の下、山と海を見ながらの野天風呂。「100%満足の一日」との参加者の声に皆が「その通り」と言える楽しい旅でした。

お陰さまで新会員がまた2名増えました。



抜海の目

「文化なんか重視していません」

と公言する自治体の首長はいないが、実際に重視できていない自治体が多い。何とかしたくとも予算がなくてどうにもならない市町村も少なくない。

最近やや薄明かりが差してきたとはいえ、長引く不景気で地方税の収入が減ってきている。さらに痛いのが、国からの交付税がどんどん削られていることだ。交付税は、税という名前がついているが、地方税などの収入が少ない自治体に国が配るお金のことである。

1990年代の不況時に国は景気対策として地方に公共事業を勧め「借金してもいいからハコモノを造ってください。返済の半分（あるいは一部）は国が交付税で面倒を見ます」と調子のいいことを言っていた。

その言葉に乗って借金をした自治体が交付税の削減に怒るのは無理もない。しかも、削減に伴い、同時に権限も国から地方に移譲されるはずだったのが、こちらのほうはさっぱり進んでいないのだ。

いま、美術館業界で最も話題になっているのが、兵庫県の芦屋市立美術館だろう。市は民間に美術館を引き継ぐ案を打ち出した。手を挙げる民間業者がいなければ、美術館は閉館となるそうだ。

この美術館は、戦後日本の前衛美術を代表する「具体」の資料を数多く収蔵していることで知られる。そういう特徴ある美術館にしても財政難の嵐は避けがたいようである。

お金がないということで言えば、北海道も札幌市も五十歩百歩である。現行の、道立6館、札幌2館体制がいつまで続くのか、楽観は許さない。

少なくとも来場者を増やすための地道な努力は必要だろう。現在の札幌彫刻美術館が何をしていて、何をしていないのか。そして今後何ができるのか。検証のために残された時間はそれほど多くないはずである。 (Y)

(左写真 渡辺行夫先生のアトリエ前で)

ギャラリーシリーズ5

原 典夫 会員

I GALLERY MIYASHITA

(中央区南5条西20丁目1-38 Tel. 562-6977)

中央区の南円山の閑静な住宅地の一角にある。オーナーの宮下明美さんは、貸しギャラリー経営20年になる。

このギャラリーの特徴は、会期が3週間単位で、宮下さんの趣向もあって、平面、立体を問わず、主として道内の抽象作家の個展が多いことである。ちなみに、この5月、6月には、ボックスアート展(青山由里子)や岩絵の具、箔などによる抽象画展(狩野立子)が行はれていた。なお、年2回、企画展として、このギャラリーを利用する作家達の作品の展示販売を行なうという。年内はほぼ埋まっている。

宮下さんは、このギャラリーを通じて、主に若い作家とのかかわりを大切にし、彼らの芸術的成長を楽しみにしているという。 月曜日は休館

II 工芸ギャラリー愛海詩(えみし)

(中央区北1条西28丁目2-17 Tel. 613-1112)

中央区円山の表参道に北向きに面してある。

このギャラリーを主宰する佐藤睦子さんが、手仕事による物作り達の作品を出来るだけ多くの人々の視点にうつたえ、手であふれてもらい、物を使う人と作る人の交流の場となることを目的にして、6年前に開設したという。

1階は出展作家の作品を販売する常設展示場、2階は個展会場となっている。個展会場は、企画展として原則13日間の会期で、陶芸、染色、織物などの伝統芸能で、現在活躍中の有力な作家を招いて作品の展示会を行なっている。

今年も既に、京焼き、清水焼きの長田豊仙(京都)や無名異焼きの細野利夫(佐渡)、「染司よしおか」染色展(京都)、高江雅人竹芸展(大分)など見応えのある作品展が行われたという。

主宰者の佐藤睦子さんの伝統芸能に対する造詣や思い入れには並々ならぬものがあり、このギャラリーの会報や企画展に招く作家の選定からも窺われる。なお、今年から個展会場は一般の絵画などの展示にも貸し出されている。 月曜日は休館

[お詫び] 前号のこの欄に掲載した弥永北海道博物館の電話番号は誤りで、正しくは716-1358です。お詫びして訂正いたします。

短歌～BIKKI アトリエ3モア

札幌 濱 久子 会員

ここに住み砂澤ビッキは十年間

制作つづけし旧篬島小学校

まず入れば「風の回廊」風音を聞く

芸術の森より収録せしもの

いくつかのブースに入るごと声あげぬ

デスマスクのあり大きなお顔

駅前に立てしトーテムポールの朽ちし上部

上の上に置く骸のごとく

朽ちかけてトーテムポールばろぼろと

土に還るをビッキ望みし

わが知らぬビッキの生きざまここに来て

体震へる感動のあり

廃校はビツキの生活空間にて

樹気との対話つづけし十年

五十七歳にて逝きしビッキの七つ道具

その妻なべて売り払ひたり

真闇なる部屋にライトをあてたれば見ゆるよ

「TOH」の美しき鑿あと

「アトリエ3モア」冬は閉館せり安らかならむ

彼のデスマスク

「思考の鳥」一本遂に倒れたり

音威子府のシンボルなりし

友の会

だより

札幌彫刻美術館友の会総会・講演会

開催される！

三上正一 会員

5月14日（金曜日）、平成16年度札幌彫刻美術館友の会総会が行われました。

平日開催にもかかわらず、総会には22名の会員が出席しました。

総会の冒頭の挨拶のなかで、橋本会長は来年が故本郷新氏の生誕100年に当たるので友の会としても記念事業を考えているとのことを述べられました。また、来賓として挨拶に立った三輪彫刻美術館館長も生誕100年の行事に展覧会・目録・講演会等を考えている由でした。

総会では、友の会の昨年度の事業活動等並びに今年度の事業計画等について熱心な論議が行われました。

議事については、以下のとおりです。（主なものを抜粋して報告します。）

第1号議案 平成15年度事業報告及び
収支決算報告、監査報告

特に意見はなく、承認されました。

第2号議案 平成16年度事業計画及び
収支予算案

本郷新生誕100年に関わる事業について、出席した会員から積極的な意見が出されるとともに、彫刻美術館との連携についての要望等がありました。また、本郷新氏ゆかりの札幌西高、北海学園などとも交流するよう要望がありました。6月と10月の2回にわたる

彫刻家のアトリエ訪問が提案され、承認されました。会報いづみの編集・発行事業への参加についても積極的な提案がありました。

第3号議案 平成15年度役員選出

会長に橋本信夫氏、副会長に斎藤美年子氏を選任し、幹事12人と監事2人を選出しました。

以上、友の会の活動のさらなる飛躍が期待される新年度のスタートが切られた有意義な総会となりました。

総会に続いて“中島宏一氏（北海道開拓の村学芸員）”の講演が行われました。

講演は、『地域のなかのミュージアム』という題名で行われ、博物館は、何のため、誰のためにあるのかという問い合わせから始まりました。その中で、博物館が持っているミッション（使命）に触れ、来たらいいのではないかという自己完結型の事業展開から脱却し、来ない人をどう来させるのか、またどうアピールしていくのかということについて話されました。

さらに開拓の村の入場者数などの話題から、札幌彫刻美術館が地域に果たす使命についても触れられました。

最後に札幌市のイメージにも言及しながら、ボランティアとして美術館・博物館の存在意義を高めるために、それらとの関わりを皆で成長させていかなければならないという言葉で締めくくられました。

いつもとは、違った観点から博物館、彫刻美術館が語られ、今後の友の会の活動の大きな糧となつた講演でした。

札幌彫刻美術館ホームページ

<http://sapporo-chokoku.jp>

「友の会だより」つづき

ビデオ制作の案内

(財) 札幌市生涯学習振興財団による平成16年度視聴覚教材制作委託事業に下記の企画で応募し、採択されました。

なおこの企画は役員会(平成16年6月

11日)に諮り、友の会による本郷新生誕100周年記念事業の一環として推進することになりましたのでご報告いたします。

- 1 主催：ちえりあ 札幌市生涯学習総合センター、視聴覚センター
(011-671-3425)
- 2 趣旨：社会教育のための教材ビデオ(15分以内)の制作
- 3 題名：「本郷新の野外彫刻の魅力」
- 4 意図：本郷新生誕100周年を記念し、本郷の彫刻芸術の真価を紹介する
- 5 内容：市内の代表作と資料写真を組み合わせ、作風、制作、設置状況などを紹介する
- 6 利用：野外彫刻画像を美術教材として編集し、学校や町内会でも楽しめるようにする
- 7 委託金：100,000円
- 8 制作グループ：札幌彫刻美術館友の会
代表 橋本信夫

編集後記

世代を越えて健康の話題しきりである。
かく言う私も一番の関心事！
世の中に風穴を開けるのはわかもの、よそもの、
ばかものの三ものだそうだ。
ここに集まった三者は、次世代に良いエネルギーを渡したいとがんばっている。
結構健康かも知れない。

(榎本)

友の会会員の募集案内

札幌彫刻美術館の支援、彫刻芸術の鑑賞・研究、会員の親睦のための楽しい組織です。

どなたでも気楽に入会できます。
また同伴者1名を含め、常設展と特別展の鑑賞が無料です。

* 年会費：

正会員	2,000円
賛助会員	5,000円
終身会員	20,000円

* 問合せ先：斎藤美年子

電話・ファックス：643-7246



春の「なまこ山」散策風景 (早川)

彫刻美術館友の会 会報「いづみ」No.8

財団法人札幌彫刻美術館内 編集責任者 濱久子

〒064-0954 札幌市中央区宮の森4条12丁目

電話とファックス：011-642-5709

平成16年7月1日発行

編集委員の連絡先：電話とファックス

斎藤美年子：011-643-7246

濱 久子：011-893-5212

(略)員好会の連絡事務局 平 案内係

号 外

平成16年度
札幌彫刻美術館友の会総会と講演会

日時：平成16年5月14日（金）13時30分～
場所：札幌彫刻美術館研修室

☆ 総会次第	司会 原 寿子
1 札幌彫刻美術館友の会	会長挨拶 橋本信夫
2 札幌彫刻美術館	館長挨拶 三輪 望
3 議 事	議長 橋本信夫

***** 第1号議案 平成15年度事業報告 *****

平成15年5月17日 総会/ 講演会、なまこ山散策36名

6月07日	第1回役員会、12回編集委員会 12名
21日	いづみ4号発送
22日	研修日帰りバスツアー 美唄～北村 参加37名
7月14日	第2回役員会、第13回編集委員会 9名
8月30日	14回編集委員会 10名
9月23日	サンクスデー、なまこ山散策20名 5号発送 15回編集委員会
10月08日	16回編集委員会 7名 25日 研修秋のバスツアー 石狩～当別 参加38名
11月29日	第3回役員会、第17回編集委員会 8名
12月26日	第4回役員会 10名 6号発送 18回編集委員会

平成16年1月08日 6号の発送5名

24日	第5回役員会、19回編集委員会 新春講演会・講師上遠野先生 浦口前会長白寿祝賀会 新年祝賀会 出席31名
2月08日	第6回役員会、20回編集委員会 9名
3月03日	第7回役員会、21回編集委員会 8名 22日 7号発送、22回編集委員会 12名
4月07日	第8回役員会、23回編集委員会 8名 28日 総会案内発送、第9回役員会 9名
5月05日	第10回役員会、24回編集委員会 11名、

次年度繰越金 49269円 (現金48767円、通帳502円)
積立て定期7口 合計 745769円

監査の結果、正確・適切であることを確認しました。

平成16年4月26日

監査 濱 久子、高津多香子

第1号議案 平成15年度事業報告及び収支決算報告と監査報告

第2号議案 平成16年度事業計画及び収支案

第3号議案 平成16年度役員選出

第4号議案 その他 4 閉会挨拶

☆ 講演会 14時30分～講師紹介 高橋淑子

講師 中島宏一氏 北海道開拓の村学芸員

(北海道大学高等教育機能開発総合センター)

生涯学習計画論講座博士課程)

演題 『生涯学習と博物館研究会

平成15年度決算書

[平成15年4月1日～平成16年3月31日]

収入の部

単位：円

	予算額	決算額	差	備考
会 費	180000	190000	10000	会員増
事 業	340000 (160000) (180000)	289000 (155000) (134000)	-54000	単価低
会員交流	100000	135000	35000	参加増
雑 収		30000	30000	S氏寄付
前年繰越	7673	7673		
合 計	627673	651673	24000	

支出の部

単位：円

	予算額	決算額	差	備考
美術館協力 サクセナー	40200 (25500)	53490 (28250)	13290	サクセナーと会員増
観覧料 館 報	(14700)	(15330)		
事業-1 -2	308000 (120000) (178000)	234500 (117950) (116550)	-73500	単価低
広報・会報・HP	140000 (130000) (20000)	139484 (125309) (14175)	-516 5309 -5825	
会員交流 総会 新年会	125000 (25000) (10000)	172760 (30645) (142115)	47760	参加増
雑 費	14473	2170		
合 計	627673	602404	-25269	

第2号議案 平成16年度事業計画

平成16年

5月14日(金)	総会・講演会
5月末	役員会・編集委員会
6月上旬	作家交流バスツアーア
7月01日(木)	いづみ8号発行
9月23日(木)	サンクスデー
10月01日(金)	いづみ9号発行
10月上旬(土)	作家交流バスツアーア

平成17年	
1月01日(土)	いづみ10号発行
1月中旬	講演会・新年会
4月01日	いづみ11号発行

* 特別事業：本郷新生誕100周年記念企画
(本郷新生誕100周年記念事業と会報「いづみ」の発行は必要に応じて役員会並びに編集委員会で検討し、実施する)

平成16年度予算

(平成16年4月1日～平成17年3月31日)

収入の部 単位：円

	予算額	前年予算額	差	備考
会費	190000	180000	10000	実績より
作家交流	300000	340000	-40000	同
-1	(150000)			30人
-2	(150000)			同
会員交流	135000	100000	35000	30人
前年繰越	49269	7673	41596	
合計	674269	627673	46596	

支出の部 単位：円

	予算額	前年予算額	差	備考
館協力	53000	40200	12800	サクセー
年会費	(28000)			
館報	(15000)			
サクセー	(10000)			
作家交流	300000	308000	-8000	単価減
-1	(150000)			
-2	(150000)			
特別事業*	20000			
広報事業	140000	140000		
いづみ	(125000)			
HP	(15000)			
会員交流	150000	125000	25000	参加増
総会	(30000)	(25000)		
新年会	(120000)	(100000)		
雑費	11269	14473	3209	
合計	674269	627673		

第3号議案 平成16年度友の会役員（名簿）

	氏名	役員		氏名	役員
1	藤島 積	顧問	12	鈴木敏明	幹事
2	寺山敏保	顧問	13	高橋淑子	幹事
3	前川一彦	顧問	14	仲野三郎	幹事
4	三輪 望	顧問	15	野崎泰男	幹事
5	浦口鉄男	顧問	16	原 寿子	幹事
6	橋本信夫	会長	17	三上正一	幹事
7	斎藤美年子	副会長	18	吉田修子	幹事
8	榎本真澄	幹事	19	渡辺洋子	幹事
9	大竹明子	幹事	20	高津多香子	監事
10	岡本憲子	幹事	21	濱 久子	監事
11	織田寿子	幹事			(敬称略)

第4号議案 その他

以上

友の会会員の募集案内

札幌彫刻美術館の支援、彫刻芸術の鑑賞・研究、会員の親睦のための楽しい組織です。

どなたでも気楽に入会できます。また同伴者1名を含め、常設展と特別展の鑑賞が無料です。

* 年会費：

正会員 2,000円

賛助会員 5,000円

終身会員 20,000円

* 問合せ先： 斎藤美年子

* 電話・ファックス：011-643-7246

* 友の会ホームページ：

<http://sapporo-chokoku.jp>